

---

# オレの部屋

霧咲 ココロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレの部屋

### 【Zコード】

N7455E

### 【作者名】

霧咲 ハロ

### 【あらすじ】

ある安アパートの一室、通称『オレの部屋』は非日常で溢れかえつている…。生意気な悪霊の子供たち。ヒマな死神の少年。真っ白な人形の青年。大食いな妖狐の美女。そして、オレ。そんな非日常たちのユル~い日常。現在作者が受験期間なため遅い更新がさらに遅くなっています。ご了承ください。

## 1・ほやきから始まるハナシ（前書き）

作者初めての投稿小説です。

物書き初心者の作者ですが、  
最後までお付き合い頂けますようがんばります。  
ぶつちやけ、めっちゃやドキドキします。

それでは小説の方へどうぞ。

## 1・まやかし始めるハナシ

お前、知ってるか？

非日常ってのはな、

意外と近くにあつたりするもんなんだ。

そう、知らないだけで。

……ん?なんだ?

いや、

オレはンなもん知らんほつが良かつたね。

ああ、欲しけりややるよ。

あつこくで可憐うしく姿のまま、この世をわざよこづかへてこの悪  
靈の子どもたちか、

その子どもたちの保護者氣取りで、全く仕事をしないヒマな死神か、

カタコトをしゃべる主食が円滑油の、やたらと美青年な人形か、

オレが小さい頃から付きまとつてくれる、食費がハンパない妖艶な美女姿の狐の妖怪か、

まあ、

どれがいい？

……つていうか

もうホント誰でもいいから、  
マイツら誰か引き取ってくれよ

マジで。

## 2・非日常たのひの日常（前編）

お待たせしました！

ご期待通り主要メンバー登場です！！

え、別に期待しない…？

期待して下さるうれしいです！

## 2・非日常たちの日常。

突然だが、

オレの部屋には、悪霊と死神と人形と妖怪が住んでいる。

オレの部屋と言つても、家賃が安いから、と言つ理由だけで選んだボロアパートのそれだ。

よつて、それほど部屋が広いわけではない。

それなのにたつたふたつしかない部屋の一つのほとんどは、台所に占領されてるときだ。

つまり、

この狭つ苦しい座敷の中に合計6人が住んでいくことになる。

異形のヤツらを人と数えるなら、だが。

なぜこんな状態になってしまったのか。

ああそうさ。

どうせオレは、小さい頃から変なもんが見えるし話せるし触れるし、挙げ句の果てには何故かそういうモンばっかに好かれるし……。

いやいや、今更嘆いても仕方ない。

そんなことよりも、今はアイツらをどうやって追い出すかが先決だ。

あ～あ、ここはアイツらがいねー分部屋ン中よりよつぱり平和で快適だ。

狭いし暗いがオレの未来ほど真つ暗なワケでもないしな……。

「ハル！」

「ハル？」

「ドコにいるのさあ」

「ドコにいるのさあ？」

「レイガ」

「ゴウガ」

「「捜してるとお？」

うつせい、悪靈ども！

ちつとして可愛い姿に騙される男じゃないぞ、オレは！  
ついでに言つと、オレはハルじゃねーツつのー

オレはアキ！！

上谷秋紀カミヤアキだ！

「あつくん出てきてよーふたりが呼んでるよー？」  
「？？」

あア死神が呼んでる。なんてシユールな。

死ぬのかオレは！

死ぬのか！！

死なす予定もねえのに 呼ぶな、  
ひまじん暇神！

「えつと、おなかスイたよ～ヒモジヤよ～でできテよ～マスターあー

テメー、人形だろ！

飯食わねーだろうが！！ 油差してやんねーぞ、ゴラー！

「そー よそー よ出てきて！」飯作つてよアキちゃん。あたし飢え死に  
しちゃうわよ？ 家の中で餓死。あんあたしつてばなんて可哀想  
な美女なのかしら」

寝言は寝てから言え！

妖怪が死ぬのかこの程度で！ たつた五時間飯食わねー程度で！  
つーか自分で美女ゆーな！  
ちつとはガマンしろ、大食い女狐妖怪しょうわるきつね！！

ツて突っ込みたい！ 非常に突っ込みたい！  
しかし、耐えろオレ！

でないと今までの苦労が全部水の泡に…。

ガキンツ！！

・・・・・ん？

ざわざわり…………、ざわきつ

「あ

「ハルツ！」  
「みーヶたー！」

やられたっ！！

やっぱ押入れの奥の（大家のおばちゃんに黙つて作った）隠し扉に隠れるだけじゃダメかッ！

くそつ、チビたちのかくれんぼ経験値を甘く見てた！

伊達に毎日遊んでねーっとか、ガキども！！

「あつくん、ユウたちじゃないよ？ ボクのチカラ。」

スイツと横から顔を出したのは黒いローブを着た美しい少年。

「ちつ、テメーか死神 ロノヤロー」

キツと睨み付けると死神はクスクスと笑つて、オレの前に降り立つた。

「いくらなんでもさあ

面白がつて いるような美声が辺り一面に響く。

「そんなもん作らなくともよかつたんじゃない？ しかもこんなとこに

「うるべー

オレだつて一人になりたいときもあるんだよ。

死神はまたクスリと笑い、少し後ろの方に突つ立つていた青年の背に隠れる。

青年は透けるように白い肌を持ち端正な顔立ちをしていた。死神といい勝負だ。

青年は困ったように苦笑すると死神の頭をやさしく撫で、しつかり

向き直った。

「デモ、ショウガナインじゃない？ 死神はコウとレイのお願いを優先させるに決まってルンだカラセ、マスター！」

青年は、どことなく発音のおかしい言葉で話した。

「そつは言つがな、人形。ここの家主はオレだぞ？ 何故そのオレが居候に虜げられなくちゃならない？ つうか何でお前は止めない！？」

人形は二口づと笑うと「命令がなかつたかラネ」とかほざきやがつた。

あ、なんか頭痛くなつてきた……。

ふと上方に絡みつくような視線を感じ顔をもたげると、そこには重力をまるで無視したむちやくちゃな場所に妙齡の妖艶な美女がたたずんでいた。

金の瞳を有する彼女の体には、異形の証　すなわち田と同じ色をした狐耳と狐尾が生えていた。

女は天井から音もなくするりと下りてくると何を血迷つたかオレの背中に躊躇無く抱き付き、何の前触れもなく耳を甘噛みした。

肩がゾクゾクする。

「何をするか妖狐！」  
ヨーロ

彼女は花びらのような唇に細い指をあて、口ロ口ロと鈴のよつに笑

つた

「あら、虜げてるなんて心外ね。」おんなに呟くしてゐるの……」

「どじがだ！」

いりんな意味で、面倒なヤツめ！

「ヨーロお前、家にいるときだけカラコン外すの止めろ！　田え見るだけでチカチカする！　あと耳と尻尾も隠せ！　誰か急に来たらどうすんだ！！　それと無駄に色氣をまき散らすな！　いーかげんうつとおしい！！」

一呼吸で言い切つて荒く息をするオレを見て、嬉しそうに微笑む美女。

あー！　この化け狐は、ホントにもうー！

「いいじやない。家に居るときくらーのびのびわせしてよう

「アホか！」  
むしろしそぎじやボケ！

「アキちゃんのイケズう」

居るだけで人を不快にさせる牝狐がぷにつと俺の頬をつついた。

それを機に居候共がいつせいに騒ぎ出して……

「そーだよ、ハル。夕飯作つてー」「そーだよ、ハル。夕飯作つて？」

「ハルじゃねーっつーのーいい加減覚える悪靈共！つづかテメーら

関係なくね？！メシ、食えねーだろ！」

いいの!」

「見てるだけで」「楽しいんだよ？」

「作つてあげてよ、あつくん

「うるさい死神！仕事しろ！」

「わざわ！」

「マスター、そんか言い方なインじやなイカナ

「だつたら止めろ、人形！」

「あら、夕飯まだなの。 だつたら代わりにあたしを食べる?」

ひさつ

「…………ああ、そつか。もともと家主に感謝なんて言葉テメーらの辞書にはねえよなあ…………」

うん、もういいよな……？

・  
・  
・  
・  
ひつちん。

「ハルがキレた」「ツー！」

「あります。じゃあ、あつくんのお言葉に従つてお仕事に行つてきま

死神

死神 ほ、う 遊ばる方 おおむね 落ち着いて……

うふふ……、怒ったアキちゃんもかわい

そんなこんなで俺の一日は過ぎて行く。  
ああもうヤダこんな生活……。

## 2・非日常たりの日常。（後書き）

「」意見「」感想「」やることましたら、是非書き込んでやつてください。

誤字脱字も見つけてしましましたら、いそつと教えてくれたら嬉しいです。

未熟な作者ゆえ至らないところもありますでしょうが、これを読まれている読者様方には、これから先も長いお付き合いになつていただきたいと思います。  
といつ訳で、これからも『オレの部屋』をよろしくお願ひします！

2008/7/29/月

### 3・朝、けふにのじゆう（前書き）

準レギュラー予定のお方、登場です！

### 3・朝、けふの朝。

今日オレの部屋に神が降りてきた。

いや、もともとウチには神サマっぽいの居たけど  
なんか本物らしき方が降りてらっしゃいました。

いや、たぶんウチのアイツもちゃんと本物なんだつねだ。

つか

オレ、キリスト教でも仏教でも神道でもねーのになんでもこいつす  
つげえのが普通に降りてくるかな。

もつとなんかそれらしい奴ンとこ行けよ。

それこそなんだ、敬虔な子羊とやらのとこ行くでもよ。

事の発端は今日の朝。

早朝

いつもどおり5時半前には田が覚めたオレは、  
いつもどおり家事をこなし、  
いつもどおり一通りそれが済んだところへ  
丁度仕事から帰ってきた死神に茶を淹れてやつて  
いつもどおり普通に一息ついていた。

ところが、

「神様?」

死神が突然変なことを言い出した。

「は？ なに言つてんだ死神？」

神サマはテメーだろ。

ボケたか？ ついに神もボケたのか？」

「ちがうよあっくん、後ろ後ろ」

死神が指差す方へと顔を向けるところのまにかそこには純白の少年が立っていた。

その背にはキラキラと後光が差している。

「あ？ 死神、コイツ誰…」

「やつぱ神様だ、お久し。つていうかどうしたの？ なんかあつたの？」

無視か。

完全無視か。

いい度胸だ死神、今日のテメエの晩御飯に主食は無いものと思え。

「う、うん。久しぶり、死神」

純白の美少年は多少つかえながら答えた。

「んで、神様何のよつ？」

「いやまあなんというか、えーと……。」

美少年は戸惑いがちにオレを見た。

なんだ?

「あの、いいの? わたから瓶が無視しているの方は……?」

お、カミナリにいやつじやん。

「あ、あっくんね。まあ気にしないで、空気みたいなもんだから。話し続けて良いから」

死神……。

「やうかやうか。よっぽどキサマ、家を追いつめたいわけだな……?」

「うんうん、何も言つたな。わかってるわかってる。オレは空氣だから何も聞こえないわけだしな。」

さすがの俺もキレるぞ?

「わ……！ 違つー、違つてー、あっくんやめてー、ごめん謝るからー悪かったって へふつ……」

良し、いいだろ?。ただしお前の夕飯主食無しは決定事項だからな。心やわしいオレは夕飯主食抜きとビンタ一発で許してやる!ことにした。

「まつたく……。んで、ここには何なんだ?」

オレは言いながら美少年を殴りました。

「あ、はじめまして。お邪魔します。」

「ああはこはこ」ゅうへつ……じゃなくて！ 何なんだよ…」

頬のはれた顔をさすりながら死神は呆れたような顔をした。

「だからさつを言つたでしょ？ 神様だよ」

ンなもん聞いたつたわ！

やつじやなくて、なんでそんなもんがここに留まんだつーのー…  
ある意味大問題じゃねーか！

つーかその前に信じられるわけねーだろ…

「えつと神です。じうわよろしく」

「ああ、オレは『マイツの家主の上谷秋紀…』

「通称『あつくん』だよ…」

死神、今日のお前の夕飯はたくあんのみな。決まり。

……その恥ずい名前をさらつと出すなや。

いや、といつかその前に神様つてこんなに簡単に降りつていいも  
んなのか？

「別にいいんじゃない？ 問題ないわ、ボクだつているしね。  
あと夕飯たくあんオンリーつて。」

心ン中、読むんじゃない！ マジで追い出すぞ…

「わわわっ、ゴメンつて…」

「つたく……。んで？ その神様つてのは何しにきたんだよ？」

「あ、そうでしたそうでした。えっと死神。」

神様は死神のほうを向くと表情を引き締めて言つた。

「業務連絡です。キミのさつきのお仕事で魂の獲り忘れが確認されました。

今回はひとつだけだったので僕が回収しておきましたが、次からは気をつけ下さい。

以上です。」

死神……

「テメー仕事サボったんかい……」

「ち、違うって！手違い！手違いだよー！」

死神必死。

俺は一度ため息をつくと、ぶーたれた死神の頭を撫でながら神様とやらに言った。

「わかつたわかつた、もう忘れんじゃねーぞ。人の生死に関わる仕事なんだし。

神様だけ、お前もこんな朝早くに御苦労さんだな。なんなら一杯茶でも飲んでいくか？」

さすがに部外者には優しくする。

「あ、まだちょっと忙しいので今日はここで失礼させていただきます

す

「そつか、じゃあ仕事とやら頑張れよ。あ、そうだ死神、神様送つ

てつてやれよ

「え？ 僕が？」

微妙な顔をする死神と

不快感をあらわにしたオレ。

「行けよ…………？」

「はいいいいいいいいいいい！－」

死神は泣きました。

“　In　白い光　”

「君もいろいろ大変なんだね」

「まね。でも楽しいよ、あの家は

「君を見ると分かるよ。でもどうして彼は自分の名前が嫌いなのかな」

「ああ、それはたぶん僕らが好き勝手に呼んでるからだと思つけど  
……。  
でもまあ上谷…もとはきっと神家かな、  
ボクはすつし〜くいい名だと思つんだけど」

「うん、僕もそう思つよ。……あ、もうこのへんでこによ

「もうちょっとこっしょに行くよ。また何時でも来てね？神さま」「でも、あそこは君の家じゃないだろ？いいのかい？また行っても」

「あっくんも口ではああいつてたけど、神様がまた来るの楽しみにしてるって。きつと来てくれたら喜んでくれるよ、心の中ではね。だから遠慮しないでまた来て。」

「本当かい？それは嬉しいね」

「うん！ あっくんはああいう人間なんだよ、裏表ありますぞ」

「ふふっ、そうみたいだね。素直じゃないけど真っ直ぐな人だ」

「ま、そーいうのが可愛くもあるんだけどー」

「そうだろうね。

じゃあホントにもうこのあたりでいいよ、ありがと。死神、仕事はきつちやつてね。」

「うう、わかつてると、それくらい。神様だつてサボつちやダメだよ。」

「もちろんや。じゃあまたね、死神。」

「うん。じゃあね、神様。」

「うへへ、オレの部屋の朝は過ぎちゃうべ。

非田常たちとの田常は朝も晩も夜も退屈しなくていい。  
だが逆を言ひと朝も晩も夜も面倒なことが起つたはなしだ。

ああ、疲れる……。

#### 4・飯、明け暮れ。

今オレの田の前には絶世の美女がいる。

「よー！」

「なーに？アキちゃん。」

目の前でブカブカ浮いていた美女は  
オレの呼びかけに嬉しそうに振り向いた。

「ついにあたしの魅力に気付いたの？ 食べちゃう～あたし食べら  
れちゃう？」

「違えよバカ。」

呼びかけるたびにコレだ。

毎回のことだが、まつたくもって疲れる。

「セニジャマ、テレビが全然見えねえ。」

キゲンよさそうにふわふわと浮いていたヨーロの表情は  
そのひとことで一変、ぶつたれた顔に変わった。

「ちよつと見えないくらい、別にいーじゃない」

「画面の5分の4は見えねーんだが、それがちよつとか？」

ヨーロは諦めたように溜息をつくと  
すとんと床に降り立ちオレの横に座つた。

すると、途端に涼しげなアロハの風が。

チクシコ一め。涼しい所、独り占めしてやがったな。

「それと、お前食つべらになら金所にあつた テロ指にまめて食つわ。

立つたつこでだ、 テロ取つてこ。」

あるヒローは呆れたようにオレを見た。

「アキちゃんわすがにそれはテロカシーなわざと、女の子は傷つくわ

おこ、ビリの世界に500年べらこ生きてる化け狐を『女の子』と呼ぶやつがいる?

「いいから取つて來い。少しくらいならお前にも分けてやらんでもないから」

「あつたくう、アキちゃんはしようがないわねえ。待つてこ

サクッと物につられるヒロー。

ハートがふたつぐらこべつこたぬ葉とウインクを一つ残して金所へ向かう。

お前、語尾のハートマークはオレに対してもじゅねーだろ。  
食か? 食に対しての愛なのか?

突つ込みながら、その後姿を見てオレは思つ。

黙つてりや、美人なのにな。

やや釣り上った金色の瞳。通った鼻筋に透明な肌。  
見慣れた俺でさえ、ため息が出るほど美しく整った顔立ちは、  
この世のものとは思えないほどであった。

まあそれもそのはず。

アイツは人じゃない。

彼女は妖狐。  
ヒトコウコウ

永い時を生きる化け狐なのだ。

人間とは決して相容れられず500年間ずっと一人だったと、  
あいつは前に話してくれたことがある。

楽だつたんだろうな、と思つ。  
だけど寂しかつたろうな、とも思つ。

そう、オレがアイツを受け入れるまでは……。

「はーいアキちゃん！お待ちかねのポテ よ」

不覚にもオレが感傷に浸つているとその空氣をぶち破る声が聞こえた。  
た。

ヨーロ、少しは空氣読め。

「気にしないの。度量の狭い男は嫌われるわよ？」

お前らといふ非常識で厄介なものを自分の家に住まわせてやつてい  
る時点で  
自分ほど度量のでかいヤツはないんじやないかと思うんだがな、  
オレは。

「あら、でも最初に書つたのはアキちゃんの話よ？」  
「何をだ？」

オレは首をかしげる。

この妖怪に何を言つたか、頭の中の引き出しを一つづつ開けてみる  
がさつぱり引っかかるものはない。

それを見て、ふつくりと頬を膨らませながらも、元気か楽しそうに  
ヨークは悪い狐特有の笑いを浮かべた。

「覚えてないの？ アキちゃん書つたじゃない、

『寂しいならボクのお家おいで。もし気に入つたのならずっとい  
つしょにいよ』  
って」

「何年前の話だ！」

オレがまだ『ボク』だった時代の話をいつまで引きずつてんだよお  
前！  
ありえねえ！

今度は永い永い時を生きてきた妖怪特有の時間感覚を發揮しやがつ  
た。  
くすくすと笑う妖狐を見るとどうしても本心が駄々漏れになつてしま

まう。

くそ、これではいつまでたつても『マイツ』は勝てない。

「それであたしはアキちゃんの家に来る』となつたんじやない。もう、あんな衝撃的なプロポーズ忘れないでよ、アキちゃんたら」

いや、まあしてねーからプロポーズ!

「つうか、タダでとは言つてねーよなー? 思い出したぞー。

幼いながらもオレはちやんと『家賃払ってくれるならね』って言ったハズだ!

いや、言つた!」

断言するじでゐるー。

すると『一』は急にくすぐす笑顔を消し『手を当ててウインクしてきた。

「いやん、そこは記憶から抹消しといとよ

「するか!

てが、今度の家賃まだ貰つてねーぞー! 出せーーー!」

「どうあえず、今はこの『テコ』で許して? ね?」

手に持つてた袋を差し出す『一』。

『それ』テコはオレのだつづーのー

「もうちょっと待つて、もーすぐ給料日だから。……それとも今体で払う?」

心から遠慮しどべ。

ヨーロはその美貌を使ってキャバクラで働いてるのだが、どうもヨイツが、どうよりか店 자체が売れていないようでは給料もギリギリらしい。

もつそなると、その余裕といつかお氣楽かげんに呆れといつかもはや感心さえするヨーロの言動。

その時

「　　ただいまー！」  
「　　ただいま、マスター。」

お使いに行つていた4人が帰ってきた。  
まあ実際買つてきたのは人形ひとりだらうけど（死神や悪霊たちは姿が見えないから）。

さて、じゃあ全員そろつたことだしこの人外どもに飯でも作つてやるか。

結局開けられることのなかつたスナック菓子の袋、  
ヨーロから奪い取つてオレは台所に歩を進めた。

## 5・晴れや、図の田の語つべ。(前書き)

うわへへお待たせして誠にサーサンしたつーー。  
せつと一段落したので再開です。

うわへへ。(^ ^)。

5・晴れろ、雨の日の田の語りべ。

「ハ～マ～だ～」

うつさい、  
暇神。ひまじん

「だつてあつくん、休みだよ？ 800年くらいぶりの休みだよ？」

気持ちは分かるが黙れ  
ハツキリ言つてうぜー。

うつせーつてんだろ、学習しろバカ神。  
ま、スッキリはしたがなオレが。

この死神（と書いてバカと読む）は久しぶりの休みに混乱してるみたいでだいぶウゼーです。  
ぶつちやけ死んでほしいです。

つか死ね。

「それはないでしょあつくん。」

あ、バカが復活した。

チツ、もう少し強めに殺るべきだつたか。

「いや、あれだけでもたぶん常人は死ぬくらいの威力……って何コラリと立ち上がつてんの！？ ちょ何してんの？ お願いだから気配消して何気にボクの後ろに回り込もうとしないで！？」

さあ、何いつてんのかなあ？ 勝手に人の思考読むような奴に手加減なんて言葉必要なかつたよねえ～？

「うへ、じめんなさいマジスミマセン… ホントに謝るから… お願い！」

つてゆうか人形何笑つてんの？ ボク軽く殺されかけてんだよ？ ねえつてば人形！ ああああっくん！ 後生だからホント許してええええええええ…！」

ハイ、軽く無視つと

一分後

「モウイエばさり」

死神が置に沈むのをいつも微微笑ましそうに見守っていた人形は俺にほうじ茶を淹れてくれながら言った。

え？ ほうじ茶とか爺くさいって？

ほつとけ、オレの趣味だ。

「死神つてドーアイう経緯でこの家に来タノ?」

「あれ? 言つてなかつたつ?」

オレは軽く首をかしげた。

「んー、なンカ最初死神が来タトキ……、

『コウたちの連れ。で、新たな居候』

てマスター言つテタケビ、詳しい話は聞いてなイナア

そういうや、話してなかつたかもな。

「ンじや死神が沈んでる間にめんぢつちーが思い出話でも……」

「うん! マスターの昔ノ話、聞キタイ!! 色々ぜんブー!!

全部……ね。

「ま、そのうち話してやるよ」

まず死神のことを話すなら、そうだな  
とりあえずあの厄介な悪靈どもの話からすつかな。

オレはイライラしていた。

やつと親の手を離れ、貧乏だがアパートの一室を借り、一人暮らし

という生活を手に入れたというのに。

そりゃ一人暮らしとつてもすでにあの外ダメギツネの居候はいたが。

それをナシとしても毎晩毎晩しくしくすすり泣きが聞こえてちゃ眠れやしねーってーの。

いや、まだ一人なら許容範囲なんだけどな。

実家に居たころからそんなもん「コマン」と聞いてるし。

だが  
だがな。

それが一人になって、  
しかも一人は女の声つつたらもうビリしようもねーだろ。  
しゃーねーからオレはヨーコを連れて声のする方を見に行つた。  
もちろん、オレの睡眠不足を解消するために。

そしたらよー、案の定でかいビルの横で  
一人うずくまつて寄り添いながらめそめそ泣いてたんだ。

ちつけー子供たちが。

で、オレは言つてやつた  
「睡眠妨害だ、どつか消えろ」つて。

『酷くなイッスかそレ』

うつさい人形、黙つて聞け。

つか、アイツらの口が今まで以上でないきなりオレを殺しにかかってきたやがったんだ。まあ口一合がキレて返り討ちにしたけど。

『三一郎ならやりソハ…。ていつか殺シニ?』

うん。懸靈なら翻と当たり前のこと、つかやりんと懸靈とは呼ばんがな。

そういうわけでフルボッコにしたのち泣いてたワケを聞いたんだ。

『先に聞いてあゲヨウヨー?』

なんか取り憑いてた家がビル建てるために壊されて家が無くなつたからつつてた。

『スルー!?

頑張ったんだけど、壊されちゃつたから、悲しくて悲しくて思い出の場所だっただから、ふたりの記憶が残つてるとこなんだつたらつて。

思いだせないのが悲しくてその記憶が亡くなつたのが、哀しかつたりじ。

『…………』

ちなみに壊した連中おびその上司は呪殺済みだつて。

『…………。そウ』

「ンで、なんか知らんがアイツらはヨーコの独断で家に遊びに来て以来、いつのまにか素知らぬ顔で住みついてたんだよ。」

「それで？それデ？」

「それを知った死神がオレン家来て、いろいろあつて監視兼保護者として居候することになった。

それだけ。」

そう言つたら、人形は続きを期待するようにオレを見たが、特に続かないでのなんとも言えない沈黙が訪れる。

……。

いつまで待つても言葉を継がないオレとこの空気にしびれを切らした人形が口を開く。

「…それだけ？」

「うん、それだけ。」

それ以外に何を話せと？

「ちヨツ、ちよつト待つテ！僕が聞きたカツタのはソノ『イロいろあつテ』の部分なンダケど？」

ああそつか。

「じゃあ、明日な明日。」

オレは欠伸を一つして言った。

「今日はもう夜も遅いし明日は祝日だから、そんとき話してもいい。  
だから今日はもう寝る。」

「むー。」

「物分かりの悪い子は嫌いだぞ？」

オレは軽く人形を睨んだ。

「い、イヒッサー！」

「よし良い子だ。」

「一わけでおやすみ。」

オレは掛け布団にくるまって瞬時に意識を落した。

「おやすみなさい、マスター」

その夜の最後に聞いた人形の言葉は、

珍しく綺麗な発音だった。

ちなみに死神はそのまんま放置した（一応あとで人形が毛布をかけてやったそうだが）

## 5・晴れぬ、闇の田の語つべ。（後編）

えーーのたびは『オレの部屋』を読んでくださりありがとうございました。

それと

かなり図々しいことは承知の上ながらも読者の皆様にお願いがござります。

どんなものでも結構です。

『つまんねー』でも『楽しかった』でも、一言でもこいです。ご意見ご感想、どんづんぐれてやつてください。

よろしくお願ひします。

最後に。

こんな拙い文章でちゃんと皆様に楽しんでいただけているか作者はほとほと不安なのですが、これからも『オレの部屋』をよろしくお願いします。

秋紀『ホント頼りねえ上にへタレだが、よろしくな。』

……アキ、なんでここにこのの？

……私のページだよ？

つていうかくタレって……。

……がんばります。

## 6・軽い畠下がり。（前書き）

更新遅くて本当にスミマセン！

期末テストも終わりました。冬休み中にはもうひよつと早く更新します！

してみせます！！

……たぶん。

## 6・軽い畠下がり。

今日は日曜日。

「あ、人形。」

「なー? マスター。」

一部のクソヤツビジネスマンや学生その他諸々を除く、みんなのおやすみの日。

誰がなんと言おうと今日だけは世間の休憩日なのだ。

もちろんオレも例に漏れず家でゴロゴロしていた。  
つまりやることがなくヒマだった。

そんな中、チャキチャキと家事をこなしている人形になんとな  
く100%気分で話しかけた。

「ナアにマスター」

「いいから」

近づいてきた人形のまつべたをふにふにとつつく、つなる、ひっぱ  
る、最終的にはぎゅうっとつまんだ上でのひねつてねじった。

「はーひーはふはー? (訳: なー? マスター?)」

「おめー痛くねーの?」

「ほへハひひ (訳: そレナリ) (元) 「

オレはつねる(つーかもつよじるの次元)のをやめ、じっと人形を見た。

見た目も感触も完全に人間のそれ。

ただ普通の人間よりキメのこまかくて白い（つか血の氣がない？）肌で、世の女性が見たら8割がたが憧れと嫉妬の目で見るだろうことが分かるくらい整つた顔なだけ。

じつとしている姿はまるで蠅人形のよう。

人形はあれだけやつたのに少しも赤くなっていない頬を軽くさすりながら

「いて……。なにか恨みでモテキたの？マスター。そうダトシても僕をストレス発散に使ワナいでほシイナあ……」

ブツブツ言いながら、流し台の方へ戻る人形。  
最初は単なる好奇心。

「お前つて結局なんなの？」

人形は皿を洗いながら器用にこちらを向いた。  
首が180°回っているのはご愛嬌

「いや、何と言ワレましテも…。

昔ノ人間に神を模しテ作ラレた人形ダッて、ま工言わナカッたつけ？」

そう言いながら人形はやつていた仕事を終わらせてこっちの部屋に来た。

その時、オレの前にきちんと正座するのはクセだそうだ。

まあ馴れたけど。

「ん、聞いてるけど」

そんなんで納得できるかつての。

「具体的に言えよ。

なんちゅうかほれ、よくあんじやん。なんだっけ、呪いの人形とか  
?」

ああ、なんでオレのボキヤブライーはこんなにしかないんだろう  
……。

「あ、人形とシテの種類ネ」

そ。まあ別に答えなくてもいいんだけどさ。

……なんか真面目に答えてくれそうな雰囲気だけど、  
正直暇つぶしに聞いただけなのだが。

ちょ、罪悪感が湧いてくるからその真剣な表情やめてくんない。

「そうだネ。形状トシテハ、人間もどきが一番近いのカモシレナイ  
ね。でも中身とシテハ自動人形オートマタアンドロイドヒューマノイド人形とか、人造人間にナルノカナ。」

……なあ人形、できれば日本語で話してくれないか?  
まったく理解できんのだが。

「まあ簡単に言ウト怨念のナイ呪イの人形つて所かナ?」

「へえ。お前機械だから油飲んだりすんのかと思つてた。飲み過ぎ

て吐いたり、ときたまその吐いた油に混じって歯車とか出でたりするし。」

「うん、ちゅーと焦るヨねアアいう時ツテ。」

くすくすと笑つて人形がいつ。

自分のことだらーが。

そのときピートと台所からやかんが音を上げた。  
人形がとたとたと台所へかけていく。

どこの主婦だお前は。

俺の前の卓袱台にコトリと湯呑み茶碗を置くと  
人形はわっさと同じところにさつきと同じ姿勢で正座する。

ただし、手にはアツアツに温められた潤滑油。  
なんか微かに香りがするから、今日は香油でもブレンドしてあんの  
かもしねり。

そんなデキた不思議な人形にオレは気軽に話しかける。

そして人形も律儀に答える。

嬉しそうに。

「お前がここに来てどれくらい経つつけ?」

ぱつりとつぶやいた言葉に一瞬キヨトンとした顔をされたが、次の瞬間にはにっこりとお得意の笑顔で答える

「そおダネ。家に来たツテイう定義で言つなら、たブン8ヶ月と12日と26分と57秒かな。日にチニスると256日ちよツとダよマスター？」

「もうそんなか」

なーんか感慨深くもなるわな。

口元に手をやつて、お得意のくすくす笑いをする人形。

「もおそんなどよマスター」

「お、いま上手くしゃべれたじゃねーか人形。」

「本当? やッタ!」

「あ、戻つた。」

「え? ?」

「日々精進せい」

「うん、マスター！」

こうして微妙ながらも人形との会話は続く。

こんな会話、最初はなかつたんだ。  
狂つた機械がただ其処にあるだけ。

人形がまだ今の人形じゃないとき。

さいしょに、のちに人形になるモノと出逢つたのはある路地裏のことだった。

学校から帰る近道。

突然そこに入形が降つてきた。

空から降つてきた人形は歯車やらバネやらを飛び散らせながら地面に叩きつけられた。

ちょうど其処には大量の「ゴミ袋」があったので木つ端微塵になることは避けられたが。

何を血迷つたかオレはその飛び散つた破片や部品をかき集め人形を持ち帰つた。

それ　　のちに人形になるモノ　　があまりにも人間に酷似していて、焦つていたこともある。

しかし大部分の理由としては、

小さい頃から悪霊や幽霊が見えたり、

その頃すでに妖怪のヨーコが俺ン家に住み着いていたことから、割とそういうことに寛容だつたからなのかもしけない。

壊れた人形を家に連れ（持つて？）帰つたオレはヨーコに無理を言つて、怪しい妖術で直してもらつた。

その際、直す代償だとなんとかヨーコはいろいろなことをねだつてきただが、粘りに粘つた交渉でおでことほっぺと首筋にちゅーで許してもらつた。

ちなみにチューされたのは俺なのだが。

その後、目が覚めた人形は自分が誰だか分からぬ上に言葉に障害が起きていた。

まあなんとか日本語はしゃべれるようだったので問題はなかつたが。

そのときの記憶は曖昧で神様に会いに行つたとかなんとか言つてたが、自分に関する記憶はすっぽりと抜け落ち、その記憶が戻るのには数日を有した。

そういうしているうちに、ちびつとずつ自分が何かを思い出してきた人形は（直接ではないが）自分を治してくれた人間、つまりオレを『マスター』と呼び、付き従うことにしてやったらしい。

ついでに、それをオレが渋々ながらも了承したときここに居座ることが決定したっぽい。

あ～そのつまりあれだ、いろいろ迷惑なんだが。

小さな親切、大きなお世話つづりヤツか？

違う?  
知るかよ。

それ以来この調子だ。

ちなみに名前はヨーイの

「まんまアタシみたいな感じでいいんじゃない?」  
の一言で決まった。

喜んでたみたいだから良いと黙つんだけど。

食費（＝オイル代）は酷いことになつてゐるが…、  
まあ便利なお手伝いわんがいると思えばいいもん、なのかもしけな  
い。

たとえそれが  
ショッちゅう主人に逆らつ  
不良人形としてもだ。

ま、別に良いけど、

どりでも。

何回か売つぱらつたろかと思つたことはあつたけど直しちやつた  
責任もあるし。

人形は一応家族だし。

「あ。」

「どうした人形」

「『めんマスター。マスターの分ダケ布団干すノ忘れた』

……いや、やつぱにつか品を売つたら。

ムカツくもん、ロトシ。

## 7・赤い花の朝（前書き）

命様に書いて頂いたイラストをイメージに書かせてもらいました。  
<http://hp23.0zero.jp/bbs/view.php?uid=himitukiti&dir=382&num=13&th=&num=122243907057&th=1>  
こですよ。

ぜひ命様の神絵をご覧になつてくださいね。

今回も死神視点ですよ。  
では、本編へどうぞ。

## 7・赤い花の朝。

あーやつぱりサボればよかつたな。

サボりかけたからあつくんに追い出されたんだけど。

どーも、死神です。

今日もボクは人殺しにいそしんでいる真っ最中です。  
ちなみに今回の標的はちょっと遠い場所にいてやっぱサボればよかつたと少し後悔している今日この頃だつたりします。

「つうせつぶー。」

神だからと言つて寒さを感じないわけじゃない。  
凍えるように冷えた風はボクや神様だつて寒いのです。  
てなわけでボクはローブをかき集めて暖を取る。

ま、寒くたつて死にやしないんだけど。

そんなこと考えてるうちに今回のターゲットが住む場所にたどり着いた。

「病院、ね。」

ボクには馴染みの深い場所。

ある意味では仕事場みたいなもんかな。

まあここは来るの初めてだけど。

「わたくし、いつたいざのお部屋なのかな？」

壁をすり抜けて標的<sup>ターゲット</sup>を探す。

きょりきょりとあたりを見回しながらちよつだけ気配にも氣を配る。

あつくんの時の舞になりたくないもん。

そろそろ廊下を歩いて行くとひとつの部屋の前にたどり着いた。

「うーかー？」

087 叫屋 | 秋葉 音里子

「……あきば、ねりーじへって読むのかなあ？ 変わった名前。」

最近の親つてよく「一ゆー訳のわかんない名前の付け方するよねー。読みにくいつたらも。」

昔は良子とか優子とかが多くて楽だったのにな。

「まあどーでもいいが。」

普通に鍵が閉まっているドアを軽く無視して通り抜けると、元気には一人の女の子がベッドから起き上がって外を眺めていた。

あれ？こんな時間に起きてるなんて、眠くないのかな。  
正直ボクは眠い。

「うんばんわ？」

一応、聞こえてないかもしれないけど、アイサシ。  
ついでに言つとくとコレもあつくんの時からやつてゐる」と。  
だつて怖いんだもん。

女の子は余程びっくりしたのか、飛び上がつてそのまま周りを見回した。

「んー？……見えては、いないのかな？」

「だあれ？」

不安におびえた声。  
そんなに怖がらなくたつていいのに。  
別にすぐ殺すつてわけじやないんだから。

彼女の動搖を抑えようとボクは彼女の前に移動した。  
ちなみに浮遊で。ちょっとくらい死神っぽく見せとかないとね。  
あ、見えないんだつけ？

「ボクは死神。」

「シニガミさん？」

「うん、そうだよ。キミは、アキバ ネリコ？」

「んーん、ちがうよ」

「ありや？間違えたかな？」

「あたしなり」「じゃないよ。あたしネリネ。秋葉 あきは 音里子。」

「あ、ネリネって読むのか。

「じゃあボク、音里子のことネリネって呼ぶね。」

「いーよ、ネリで」

「うん、じゃネリね」

「ネリネじやなくて、ネリだつてば」

「あつわかつてるよ、ネリ」

月明かりに照らされたネリはネコのパジャマを着た小さな女の子だった。

見た目的にはだいたいユウとレイと同じ年くらいかな

「それでシニガミさんはなにしにきたの？」

「あ、そうだつた」

忘れるところだつた。

「えつとお、ボクはキミを殺しに来ました。キミはもうすく死ぬから、お迎えつて言つたほうがいいのかな？」

ネリは一瞬ポカンとして、それから急に悲しそうに顔を伏せた。ボクの言葉に対してのいつもどおりの反応。ある意味それがないと安心できないよボクは。

「あたし、しむの？」

「うん。」

「そつか」

「いつ？」

「今晩中。ボクとしては月が綺麗な間の方がいいと思つんだけどね

「そかな」

「ボク的にはそれがおススメ」

「ふうん？」

ネリはちゅうとだけ首をかしげて頷いた。

「でもこりしにきたつてことは殺人狂かなにか？」

「殺人狂の部分だけ漢字にできる最近の小学生に疑問を抱いた今。つて違うよ！ 魂を取りに来たの！」

「タマシイ？ てことはアクマ？」

「天使と言つてよ。まあ実際問題神様のパシリみたいなもんだけど」「パシリ？ ださ」

なんか泣きたくなつてきた

「で？ どうするの？ パシリさん。いつタマシイとるの？」

「んー君が望んだ時かな。」

てゆーかパシリさんはやめて

「のぞんだ？」

「うん、今夜中ならいいよ。いつでも言つてね」

「じゃいま

「え？」

「いま殺ヤつて

「殺つてつて… どいで覚えてくんのをやつこつ言つ方。」

「どうせしむならはやいほうがいいでしょ」

「…まあいいけどね。親御さん呼ぶ？」

「んーいいや、どうせしむならよんでもムダだし。しだらくるだろうじ」

「そつか。この世に未練は？」

「ないとほいきれないけど、このとこじこにはいいけいけんつんだとおもうよ」

「……ませてるね」

「おとなびてるといつてちょーだい」

「背伸びしてるねー」

「さきにしゅ?」

「わかったよ。それじゃ良い眠りを。」

そういつてボクはその小さな胸に鋭い鎌を突き立てる。

「Good night, ネリ。良こ来世を

\* \* \*

「あーねむー」

結局、ボクは徹夜したっぽい。

最初の犠牲者が早く終わってホッとしてたけど、やつぱりあのあとも仕事しまくって、帰ってきたときにはもう時間が経った

寝るのも面倒になつて窓についている手すりに腰かける。手すりはきいと小さく軋んだ。

「ただいま」

ほとんど習慣になつたあいをつもちろんこんな時間に返してくれる人なんていない。

寝静まつた町。

人形でさえ眠つている」の時間にボクは誰にも返されない挨拶をする。

匂いだ風をこの身に受け、ゆっくりと空気を吸つた。

この時期特有の冷たい澄んだ空気。

カラダの中が透き通つていくような気分になる。

「死神か…？」

思いがけず後ろから声が聞こえて、内心ちょっとびっくりした。  
空気を震わす少し低い声。

「おかえり」

そのひとことは静かに優しく響いた。

振り返るとまだ眠そうな目をダルそうに持ち上げ彼はゆっくりと手すりにもたれかかった。

「ただいまあっくん。ごめん、起しちゃった?」

「ああ。もつと謝れコノヤロー」

「冷たつ! ボク徹夜で仕事してきたのに」

「知るか」

彼のいつもの口癖にボクはけたけたと笑つた。

「つーかおい、なんだこの花は。お前の仕業か?」

「んー?」

ボクも気づいてなかつたが手すりには何か絡みついている。  
ああ、これつて……

「あれだよ、あさがんばな」  
「はあ？」

あ、面白い顔してる。

今度はボクは意地悪そりに笑つて言つてやつた。

「神様に創つてもらったの。朝顔と彼岸花のミックス」

「……。たしか神様忙しいつづったよなー。そんな眞面目で大変そうな神様にまだ仕事を増やさせる馬鹿者はドコノドイツかなー？あつはつは一神に代わつてぶちのめしてやるうかなー。」

「じょつ[冗談だよー]そんな怖い顔しないでよ。」

あつくんてば冗談が通じない。

「彼岸花の亞種だと思つよ。奇形かな、珍しいね。」

「今度はホントーだろーな」

「もつちひるこ」

そのときちょうど朝日が出てきた。

田光も月光も何千年何万年と見てきたのに今でもまだ綺麗だと思つ。

「綺麗だな……」

あつくんが小ちくつぶやく。

ボクもコクリとうなずいた。

でもね、あつくん。

ボクはもつともつときれいで美しいものを知つてるよ。

「キレイだね、あつくん

ボクはほとんど寝かけているあつくんを見ながら言った。

よくみるとあつくんの田の下にはうつすりとくぐ。  
きつと宿題が終わんなかったんだるーな。

「あつくんですら神々しく見えるよ、死神だけに

「面白くなーんだよバカ」

一蹴されちゃつたけど、本当にうつ思つてるよ。  
絶対本人には言つてやんないけど。ムカつくじ。

「そうゆーときは花とかをたとえに使うもんだつーの」「花、ねえ」

そういうつてすぐそばの紅い花を見るとあつくんが何かを思いついた  
よつて顔を上げた。

「そういや彼岸花か。お前にゃなじみの深い花じゃねえのか、死神」「あー、もうすぐお彼岸かー。じゃあネリネもすぐ帰つてくるなー」「ネリネ? 今日のターゲットか?」

「うん。ボク読めなかつたよー漢字」

あつくんは少し考えるよつてこめかみを一回たたいて言った。

「ネリネ……ああ当て字だうつな。ネリネつーのは花の名前だ

「へ? そーなんだ」

「知らなかつたのか?」

「だつてボクらが創つたのは人間だけだもん

「そーか。女の子か?」

「うん。」

「しあわせだつたか?」

「たぶんね」

「そうか、ならいい。これからも仕事はまちうりやれよ。でねーと即刻追い出すからな」

「りょーかい」

そうこつてあっくんは色褪せたのれんをくぐつて台所に行つてしまつた。

ボクは好奇心でその背中越しにあっくんには内緒でちょっとだけ頭をのぞいてみた。

とたんに心配と疲労の嵐が流れ込んできた。

いつまでたつても帰つてこないボク。

死なないとわかつていても  
見えないとわかつていても  
心配でたまらない。

でも自分にはどうすることもできない。  
仕事なのだから。

行かせたのは自分のだから。  
だからせめて

帰つてきたら真っ先に言つてやるわ。  
おかえりって

こんな時間までよく頑張ったなつて。

ボクはこれを感じてジーンとなつてしまつた。  
あっくんのひねくれ者め。

えへへ。

これだからあつくんの近くは離れられない。

ついでにネリネについての知識も流れ込んできた。  
なるほど、ネリにはぴったりの花だとボクは思った。

【10月13日の誕生花 ネリネ。花言葉…輝き、また会う日を楽しみに、華やか、箱入り娘、幸せな思い出】

ボクはあの箱入り娘に最後の幸せな思い出を残してあげることができただろうか。

## 8 . あべまで普通（前書き）

新キャラ登場です。  
うわ、二ヶ月ぶりの更新って。  
すみません！

ある日の朝、

「ハレルヤ  
h a l l e l u j a h ! !」

オレの部屋に神を讃える声が高らかに響いた。

それはテスト明け休みで死神や悪霊たちとだらだらしていた時のこと。

何もない空中に突然剣がはえてきた。

死神の頬をかすりかけたが、死神は寝ころんだまま微動だにせずにつこりと黒く笑ただけ。

こっちを向いてきたからオレも微笑み返してやる、よりどス黒く。

宙に浮く剣に対して誰も驚くワケでもなく怖がるワケでもなく、オレは部屋の端に置いてあつたものをただ淡々と手にした。

生えてきた剣先は不器用に空を切り裂く。

やがて人が一人通れるくらいまで斬ったところで剣が引っ込み、ガツタガタの裂け目から今度は何やらズルリと黒いものが出てきて…

…

オレはそれを問答無用にたたき落した、ハエ叩きで。

「ぶツ！？」

べしゃっと音がして出てきたものが落ついた。  
続いてその頭を思いつきり踏みつけた。

「これで侵入者は動けません。」

という訳で、『不法侵入者の捕まえ方（上谷家風）』をお送りしました。また次話でお会いしましょ「待て待て待て！終わるな！俺来たらばっかだし！」下のハエがうるさいですね。

「うつせーなこの不法侵入者が」

「あつアンタなあ……！」

「黙れ潰すぞ」

軽一く殺氣をこめて言つと、とりあえず大人しくなつたようだ。

「で、お前はなんだ？」

いつもの通り聞く。

これがいつも通りというのが果てしなく哀しい。

黙り込む闖入者に、死神はかつたるさうに立ち上がって憐れみの目で覗き込んだ。

「キミ、ちゃんと謝つた方がいいよ。あつくん怒るとすこいく怖いんだから」

「くくっハレルヤ！ 勘違いすんなよ、俺別に怖いとかねーし第一俺は人間になんか絶対謝らな……って、はれ？ 死神様？」

「へあ？ ボクを知ってるの？ ……あ、フイーくん。」

死神が驚いたように目を丸くする。

オレは大きなため息をつき、死神に訊いた。

「また死神の知り合いか？」

「えへへ、まあね。友だちの悪魔だよ！」

照れくさそうに頭を搔きながらオレの足元を指す。

その言葉に今日一度目のため息。

「友達結構大いにつくるがいいさ。だが、お前の友達に住居不法侵入罪を犯してないヤツはいないのか？」

ちなみに天下の神様も立派な不法侵入者。

「まあ、…………いなかな。」

頬を染めてハニカんだように言ひつく。

つーかいないのかよ。

そこにアクマ（？）が口をはさむ。

「死神様を責めんな人間風情が！ 無断で入つても誰も咎められな  
いくらい高尚な存在だつてことだ！ ハレルヤ！」

……てゆーかフツー俺らは見えも触れもしねーから気にする必要  
もないだけだけど」

あ、そつか。

前半は足の下にいるやつに言われたくなかったが、後半部分を聞いて妙に納得したオレは足の下の悪魔を放してやることにした。

「ツてー……。ンだよ、こいつ

「口のきき方には気をつけろよ悪魔」

「構図から行くとあつくんの方が悪魔っぽいけどね？」

「確かに。マスター、もウ少シヤわラかく接してあゲヨウよ」

「ハルの悪魔ー！」

てめえら揃いもそろつて……

「やうがやうが、みんなで追い出されれば怖くないよなー。 出  
てけ」

言葉と共に「」と微笑んでやる。

「すンマセんっシたあアアアアああーー！」

「「うわああああん！ハル怖い

！！」

「ぐふ……っ！」

オレが優しく笑つて言つてやると、人形は即座に土下座し、悪靈ど  
もは抱き合つて顔を泣きだし、しまいには死神が魂が飛んでつたか  
のように倒れこんだ。

おいおい、オレは悪魔か。

現職がいる前でやめてくれ。

「冗談だよ、ホレ」ちの世界に戻つて來い

死神の襟元をつかみガクガクと揺らす。  
まあ、半分以上冗談じゃねえけど。

そんな光景を悪魔はぽかんと見ていた。

「おら見せもんじゃねーぞ」

「死神様……何なさつてんですか、この人間、もつすぐ殺すんでしょ？」

「え？ なんで？」

死神が素つ頓狂な声で逆に訊き返すと、悪魔はますます奇異な顔をして

「なんであつて、俺らの姿が見えてるどーんか触れるつーことは、もう死期も大分近いってことですよな」

「あーあー。でもあつくんはボクの家主なんだから。てゆーか見えるのとかは体質だしね？」

「そーゆーひつた。わあひとつと出でけ」

てゆーか、そこに開いてる空間の穴何とかしろ！

妙に部屋が暗くなるし急に空気は冷え込むしつかなんかどろどろしたヘドロみてーなダークマタみたいな物質出てきてんんですけど！？

悪魔はそこに突つ立つたままうつむいた。

と、肩が震えだしたかと思うと、口から声がもれだした

「フイーくん？」

「……うくくくくくく……ふふふふはははははははははは……  
ハレルヤ！ なんて素晴らしい！ ハレルヤ！ ハレルヤ！」

「なんだ悪魔狂つたか、知り合いの悪魔<sup>エクソシスト</sup>払い呼んでやるつか？ いろんな意味で楽になるぞ一瞬で」  
「ハレルヤ！ 遠慮しとく。そつかアンタがねえ」

悪魔はオレの前に立ち、ジロジロと全身をなめるよつに見る。  
色々言いたい」とはあるがどうあえず

「変態がこの野郎」

「へぐつー。」

一発殴つとく

悪魔はゴロゴロと転がり、壁に激突。かなり良い音がした。  
しかも打ち所が悪かったのか、悶絶する悪魔。

「何すンだあああああ！ ケンカ売つてんのか！」

「そりやこいつちのセリフだつつの。ケンカ買つつつんなら今なら五  
万で売つてやるわ！ 来い。」

「高っ！」

大げさに驚く悪魔。

「アンタ……、そおかなるほど、いろいろ納得した……。神の管理人  
やつてられるわけだ……。えーと、なんつたつけアンタ……？」

「アキだ、上谷秋紀。」

「かみや、あき……アキ……ああ、アキね。はは、ハレルヤ……なんつ  
一名前だ」

お前にだけは言われたくない。

悪魔にいふ名前じゃないとか言われると、縁起悪いいつつか気分悪い  
わ。

「俺は

「悪魔のフイーくんだよつー！」

今度は死神が横から口をはさんでくる。

「うっせー、おめーに訊いてんじゃねーの…」

「マスター変なとこでキレないで…」

「お前も」「うゅー時だけ綺麗な発音してんじゃねー…」

突つ込んで悪いかああん？

最近いつかいキレイて家事放棄して悪かったと思つてたから冷静に過ごしてたつつーにわざわざキレイのはドコのドイツだ。

「いいよ、気にすんねイ。フィーって愛称も氣に入つてんだ、アキ」「そか。でもまあオレの家族の問題だから正直お前は関係ない」

アキ、か。

珍しくマトモな呼び名だな。

「なんか親近感湧くわ、お前の名前。しばらくいじってもいいか？」

「は？」

「いいよー、何日でも泊まつてつー！フィーくんなら大歓迎！」

「フィーくんよろしくー！」

「お手伝いシテ下さルナラ、レバフテモウゼ。よウコソ上谷家へ」「死神に招待される悪魔つてのもなかなかシユールだがね、お邪魔させていただきますわ。つーわけだ。世話んなるなアキ」

「はあああああああ？…」

このあとオレが死神と人形に最高のブレーンバスターを極めたのは言うまでもない。（悪靈どもは逃げて、悪魔は爆笑してやがった。  
殴つといたけど）

## 8 . あべまで普通（後書き）

もうすぐ春休みも終わりですね。

とこつわけで、またまた更新が遅くなりますー。  
本当に申し訳ございません！

こんな愚作者に呆れないで読んでいてくれると嬉しいです。

## 9・何気ない会話（前書き）

な、七八日ぶりの更新……！  
つい、嘘うそ未熟者の作者で本当に申し訳ありません！

## 9・何気ない会話

（死神視点）

手帳を軽くパラパラとめくる。

それだけでも目を見張る人数がそこには示されていた。

ボクは苦い気分でちょっとだけ息を吐きだした。

今日もボクはマジメに仕事をしてますです、ハイ。

『死神、キミは確かに今真面目に仕事をしてるよ。でも、キッカケは秋紀さんに家を追い出されたからじゃなかつたかな？』

頭に苦笑したような声が流れる。

「神サマー、それチガーウ。追い出されたんじゃなくて、自分から出てキター。ボクなんにも悪いことしてナーバイ」

『なんていきなりカタコトになってるのぞ』

「人形のマネ？」

弁明するためにちょっと工夫したけど相も変わらずつれない神様。

『似てないよ。それに悪いことしてないって？ 仕事を危うくサボりかけたキミが何いってるの。秋紀さんにさんざん叱られて逃げてきたんでしよう？』

「ちえつ、見てたの。人が悪いね神様も」

『僕は神だよ。それに僕はウソが付けないから』

……まあ、言葉の綾なんだけど。

「知つてますよーだ。で？ 次はどーだって？」

『そうだったね。次はそう遠くはないよ、せこせこ一〇〇メートル……』

「普通に遠いよ。知つてる？ 日本列島つて全長2800kmくらいなんだよ？」

『知つてるよ、僕が作ったんだから』

今度はボクが苦笑する番だった。

「もつ、混ぜり返さないでよ。ていうか何で…それが何の担当かな？」

ちゅつとだけ口にしもる神様。

『…………死んじやつたよ』

「引き継ぎもナシに？」

『うそ』

「止めてよー」

『そんなこと言つたつて……』

ボクはため息をついて言葉を返す。

そうしていろいろうちに目的地が近付いてきた。

「どーせ黙つて死んじやつたんだる。まつたくもつ何考へてのせ。神様も氣づいてよね！」

そうこつたけど、神様からは沈黙しか返つてこなかつた。

「かーみさまあ？」

『……死神』

「何さ？」

『僕もそろそろ死ぬべきかな…？』

「は？なに言つてんの神様』

『だつて創世の頃から居るのつてもう僕たちだけじゃない。そもそも潮時のかなつて』

「神様のバカ！意気地なし！そんなコトしたらボクひとりになっちやうじやない！！！」

『……何そのセリフ？』

「ヨーゴがやつてたギャルゲーより引用』

『……それはキミもやつてるのかい？』

「悪い？」

『……あははつ。いや、いいんじゃない？ キミひじいよ』

「それ誓めてる？』

『うん。楽しく生きてるつじじやない。キミも、ヨーゴさんも。』

『「むっ、そつかな」』

『ヨーゴさんかあ、実は僕会つたことないんだよね。今度遊びに行く時に会えればいいなあ』

『また来るの？』

『そのつもりだよ』

「そつか。次はお土産期待。と。あ、もう着くみたい。じゃ、この辺で」

『うふ』

『これから死ぬ人には悪いけどボクはもうじばらく死なないよ。』

『あとでと、これから死ぬ人はどんな人かなつと。』

もつとせめしるのをHنجャイしたこも。

やつ思えるよひとなつたのは、ダレのおかげ？

『おかげ』つてこつかだれの『せい』？

結論：あつくんのせい

これしが原因が思いつかなか。跟ふでやうつかな、でも極へ難せんと無意識に兼つけやうだよな。

ま。いつか。  
明田ヒツコト

ボクはまだまじの世で遊ぶ。

だつてここせ楽ししくて愛おしこじがこつぱこあるんだも。 娯楽も仕事もかかわり合こも辛い時だつてあるけど、今は楽ししくて仕方がない。

ゲームもマンガも、そして人も。

絶対にはなしてなんせぬもんか。

あつかんべー！

つて報告書に書こりやねつとい。

くひひひひひ！

## 9・何気ない会話（後書き）

前回の更新がいつだつたっけ？  
え？ 春休み終わり直前？

H A H A H A [冗談じやねーぜジョニー]。

更新が遅いにもほどがあるってんだ。なあマーク？ もう夏休み近  
くだぜ。

ホントウニダメダコノサクシャ○ーン  
スランプとは恐ろしいものです……ツ！

呆れないで見て下さつていい旨とま、更新が遅くてごめんなさい。  
そして、本当にありがとうございます。

## 10・鳥が帰る、夕方。（前書き）

やつとりや、十話目です。

これからも

がんば……がんばりま……

……頑張りたいと黙つてこまかー。（おこ）

## 10・鳥が帰る、夕方。

「アキー」

「ひみつ」。

「ハルー」

「あーううせー。」

「アキちゃん」

……じりり

「ひみつせーつってんだろーが！ 疲れてんだよ！」やあー..」

怒りをぶつけるようにちやぶ台をひっくり返す。  
ちつ。湯飲みの茶をかぶったのは悪魔だけか。

「なにあるの、アキちゃん」

飛びすれど茶と悠々と避けてのんきに返答していく。「..」。

「疲れてんだつってんだろーが話を聞け無駄飯食らい狐。やる」とが山積みなんだよ」

「ああ、なーるほど、ボクとおれりこだね」

「お前と一緒にすんな、暇神」

何故か手元にあったトイレスリッパで後頭部をはたく。

スパンといい音がなった。

いや、ハツ当たりだとはちゃんと自覚はしてるから手加減したけどね。

視線ななめ下で死神があまりの痛みに「口口」口と悶えていたしでも。その横で熱いとわめいていたアクマはあわてて人形にお茶を拭いてもらつていつの間にか復活を果たしていた。

「アキ！　さすがに横暴だぞ！　いくら神の管理人やじましやつてるからつて、その扱いはないだろ！」

なんか言つてきたが、意識があるだけマシだと思いやがれ。あんなんと一緒にされたないの。

「お前この幾日で何学んだ？　人形の飯の味とか悪霊どものかくれんぼの隠れ場所とかだけとか言わねえよなア」

「まさか！　それももちろんあるけど、なにより、アキの拳固がオリハルコン並みに硬いとかアキの蹴りの威力ハンパねえとかアキの趣味が盆栽とかほうじ茶がスキとか意外と爺くさいとか近隣の人外連中には恐怖つづーか恐怖の対象つづーかだけどご近所のおばちゃん達からは結構ウケがいいとか実家が神社とか　テコを指にはめて食うのがスキとか、その他イロイロと知った……つて、のわうわ！」

「よーし歯あくいしばれ　」

前ふたつはむしる本能にしみこませるくらいカラダに刻み込んだからいいとして、なんで知つてんだ、特に後半。

本当はジャイアントスイングくらいはかましたかつたが、何分狭いアパートの一室、簡易ドロップキックくらいが関の山だ。

「つーかお前、ここまでここにいんだよ

「はあ？」

ある程度の威力に加減したので、辛うじて意識を保ちきつてよろよろと体勢を立て直したアクマは、言葉の意味がわからないと言つように、首をかしげた。

「すつとぼけんな。なんかしたくて来たんだろ？ 本格的に住むとか言いやがつたら、ブレーンバスターから始まる天獄地獄コンボお見舞いすつかんな」

「あーそう、バレてたの。てか天獄つて……」

「当たり前ダよ、逆二口の家の住人で気付いたナ�이方がびっクリだヨ。ね、マスター」

はイお茶、とアクマの前に湯飲みを置いて人形が口をはさむ。オレの前にもふわりと湯気が香ばしく香るほつじ茶がことりと音を立てて置かれた。

その通りだ。

それを聞いたアクマはやつちまつたとでもいいたげにガリガリと頭をかいだ。

最近思つたのだが、やつぱりコイツ、悪魔のくせに言いたいことがはつきりと顔に出る。

仕方なしと判断したのか、ため息をついて開き直つたかのように手元のお茶をすすとすすつた。

「まあ待て、あとちょっとで準備できつから、な、それまでヨロシク、ハレルヤ！」

ヨロシクじゃねーよふざけんな口ノヤロー、と言つたといつこひではあつたのだが

ふと、気になることがあつたので前言を押しどぎめ聞いてみた。

「ハレルヤハレルヤつていつてつけど、お前そんなに晴れてほしいの？」アクマなんだつたらハレとか明るそうな天氣じやなくつて雨とかのほうが好きそうな氣がすんだけど」

「んー、そうだな俺としてはジメジメするから雨より曇りの方がスキ……つておい！」

「おお、ノリ突っ込み。

悪魔つて何でも出来んのな。

「ちっげえよ！ ハレルヤつづーのはヘブライ語で『主をほめたたえよ』って意味！」

「そうそう。アリルイヤとも発音するんだけど、日本語だと言ひにくいんだよねー」

「ふーん、ヘブライ語とかアーメンくれーしか知らんし」

従兄弟アイツに聞きや死ぬほど教えてくれんだるーが。

いや、やつぱいいわ。そもそもとしますアイツにあいたくねーしあしかしなあ

「珍しいヤツもいるもんだな。悪魔の中でも神さま崇めてる奴なんていただんだ。オレの知つてる悪魔つづーか赤い蛇っぽい奴は天使のくせにめっちゃ嫌つてたぞ、神さま。実際会つてみたら気まぐれそうだけど、真面目っぽくてお前よか好感抱いたなオレは」

つーかアイツは短氣なんだよな。

なんだよ、『葡萄の木植えて何が悪いってんだ、美味しいじゃんリンクもブドウも。マジイラッた』つて。

そこで視界の隅に入つた黒い布。

「あ、そか、死神がいたか」

納得。

が、アクマはそれでは納得しなかつたようだ。

「ハツ！ 何勘違いしてんのかわかんねえが、少なくとも天上の神なんかだあれが敬うかってんだ。死神サマは確かに尊敬はしてるが、主じやねーよ。俺のあるじはただ一人のみ……」

そのとき不意に、アクリマの手が光りだした。

「ちいと早いがこんだけの力場だ、なんとかなんだろ？』

アクリマはしゃしゃしゃしゃーと光ったままの手を床に滑らせて、  
みるみるうちに光り輝く魔法陣が部屋の床を占領していく。  
そしてほんの瞬きの間に部屋は暗い光に包まれていた。  
おいおいこには借家なんだぞ、消せるんだろうな。

- 1 -

「もうちろん、召喚し終わつたら消えるさ！」

この数週間でオレの言外の言葉を学んだらしいアクマはオレが何か  
言つ前に応えてきた。

魔法陣のラスト一筆まで書き込んだのち、最後の締めとでも言つよ  
うに若く美しい紳士の容相をした悪魔は、ビームの鍊金術師のよ  
うにぱんと両手を合わせ、ニヤリと笑つた。

「私は求め訴えたり。  
このくそつたれな世界を愛し憎み破壊し偽

り見届ける、我が名、光を愛せらる者 メファイストフューレスの名  
において、希う。万物は帰り還れ。その過程において我は欲す。現  
は夢になり、夢は現世になる。我は願う、我が名とこの場の力を糧  
とし彼の者をあるべき場所から俺が今いる場所へといざなわんこと  
を！」

その合わせた手から、小さな火花が散つたかと思うと

କାହିଁବୁଥିଲେ କାହିଁବୁଥିଲେ କାହିଁବୁଥିଲେ କାହିଁବୁଥିଲେ-

紅蓮の炎が部屋を包み込んだ。

が不思議なことはその火は壁やまごなく天井を焦がさず魔法陣の周りを舞つてゐる。

しにらへ思ひながら不安心が表  
情を浮かべた。

暗かつたものから一転、歓喜のそれに代わる。

「キタツ！」

どんづと爆発音がして炎は消え去り部屋にもうもうと白い煙が包み込んだ。

「笑い過ぎじゃアホ」一回もむせてんじゃねーか」

「のわっー。」

背後に立つオレに大げさに驚く悪魔。

「あっあああああきい？！」

「うん？」

おかしな驚き方をする悪魔 メフィストフュレスにフライングクロスチヨップ

吹っ飛んで壁にめり込んだメフィ…ああ長いアクマのまんまでいいや はぼこっと壁から這い出てきて、叫んだ。

「なんで生きてんだよ！ 地獄の炎で焼いたんだぞ！ おかしくね？！」

「私が護つたんだもの、怪我なんてするわけないじゃない」

得意げと言つか余裕といつか当たり前にあたりまえなことをしたと  
いう表情の口一口に、脱力をした悪魔。表情的には、绝望という言葉はこういった時に使うのかなって感じの顔をしている。  
まあ普通だわな。

てか今までオレの人生で起こったことを考えたら、地獄の炎なんかいくらでも見てきてるし。

一口に地獄の炎つつたつて、ゲヘナの炎とか灼熱地獄の黒い炎とかあるしなあ。

ちなみに黒炎を初めて見た幼い頃のオレの感想は「キモ」だったそ  
うだが。

「お茶目のもいい加減にしなさい、いつでも殺るわよ」

「だ、そうだ。残念だつたな」

まだちよつと悔しい表情が取りさられていない悪魔は少しでも自分のペースに引き戻そうとしたのか、高慢ちきな笑みを浮かべて言い放つ。

「別にそこまで殺そうとか考えてねーしな。死んだらそれはそれでいいかもくれーにしか」

イラッときた。

「死ぬか?」

「うつうそです違いますほんとは生きてこらっしゃってくだせつてうれしいですってハレルヤ　　あああー」

一つため息をついて、怒りを納める。

さすがにこれ以上怒つても仕方なし、壁が一部焦げたくらいで、家具やらなんやらに傷がつかなかつただけいいことにしておけ。大人になつたなオレ。

そして怖えな大家のおばちゃん。

「で、何が来たって?」

「よくぞ聞いてくれた!　彼のお方こそ、俺が我が主と称える方、その名は『るしふ…』」

どがじんつ!

得意そうに語りだそつとした悪魔の頭に怒りが込められた重い鉄拳が降ってきた。

ちかちかと瞬きを繰り返している目からは衝撃の瞬間確かに星が飛

びだした。

「ん？」

「あ！」

白く煙つていた靄の奥から現れた男は全身真つ黒だった。まるで闇で覆われているみたいな。

しかしよく見てみると、そこまで特異な服装でもなくダークスースに、表が黒で裏地が紅のマントを着ているだけだった。  
見た目的には20代中盤から30前つでどこか。

中世的だが、やけに美人というかやたらめつたら整つた顔立ちをしていた。

人形に勝るとも劣らずってかんじ。

ん？ そーいや人形にどことなく似てるかも。

その真つ黒青年はその細く形の良い顎をついと動かして悪魔に一瞥をくれたのち、部屋の中を見回すように視線を動かした。

「ルシファー！」

死神が驚いたように目を見開き、彼に向つてぴんと人指し指を伸ばした。  
こらいら、人（？）に向かつて指されすんじゃない。

「ん？ ああ死神さん、おひさしふり」

「おひさー！ そかフィーくんが召喚したのキミだったの。そりや召喚したくなるよねー 最近特に必死だもんねー」「からかうな、恥ずいから

恥ずかしいと言いつつも、真つ黒青年の表情筋はほとんどその役目を果たしていない。

口ではとてもわかりやすく照れているのだが、表情が変わらないの  
でその真意は非常に読み取りづらいものとなっている。

だが、表情が豊か過ぎて逆に心が読めないヤツをアキは嫌というほど知っているので、いつそ完全に無表情な方が感情を読み取りやす  
かつたりする。

人形は新たな客人を前にお茶の用意をとパタパタキッチンに向かい、  
はじめてみる客人の前に珍しく姿を現している悪霊たちは物珍しそ  
うにくるくるとまわりをまわっていた。

ルシファーの登場により状況が混沌となつていて、最初に口火を  
切つたのはオレだった。

もちろんお馴染みの言葉となつてしまつているこの言葉を言つため  
に。

「だれだ？」

「ああ、私はルシファーという。魔界を統べる者のひとりを務めて  
る者だ。普段は魔王とかすべての悪魔を統べる王とか墮天使などと  
呼ばれている」

ほんの一言言つただけなのに、聞いてもいないとつらつらと並  
びたてる。  
へえ、手間が省けてラッキーだ。

「聞いてないことまで律義に答えてくれて、ありがとう。で？ 魔  
王、とやうさんはなにしにきた」

魔王 ルシファーはオレの質問を華麗にスルーし、別のこと話を  
しだした。

もちろん無表情で。

「お前のことは聞き及んでこぬ、カミヤ アキ」

「くえ、どんなふうに?」

「聞きたいか?」

「魔王にウワサ聞くなんて縁起悪そうだし、遠慮しどぐ。しかも全く関係ない魔界のだし」

そこで魔王は表情をちょっとだけ落とした。  
もじりん口調だけ。

「やうか。ここにいるのも念め、なにやらアゼルやベルゼ果てには  
サマエルがはなしていたものでな」

サマエル……、あーあの赤蛇野郎のことか。

そういう一瞬だけちらりとアクマに目をやる。  
つられて魔王もそちらを向き、ほんのかすかに 無表情な奴を見  
慣れていないとわからないほどほんのちょっとびり  
眉を下げて表情を暗くした。

「ウチの馬鹿が申し訳ない」

やつれて魔王はペロッと頭を下さた。

「や、アンタが謝るよつねーよ

んな簡単に頭下げんな。

魔がつくとはいエ王の頭はそんな安いもんじゃねーだろ。

「しかも今回の場合はあなたは呪喰くわいされちまつただけだろ?」

それにもとはといえば原因は……

「オラアクマ、起きんかい」

「メフィスト、減給食らこしたいのか起きる」

オレと魔王はほどとんど同時に言った。

息が合づな。

ふつと田を魔王の方にせると、魔王も「ひりを向いていて、何かが通じ合つたように感じた。

次の瞬間にほどひりともなく握手を交わしていた。

「うひちは任せろ、一応客だ。お茶でも飲んでればいい。おい人形、茶。ほうじ茶」

「わかった。では改めてお邪魔させていただく」

そうこうした時にますでにひやぶ田のまじに腰を下ろしていた。

人形はすかさず、すでに出涸らしなくなった急須の茶を捨て湯呑みに新しいほうじ茶を注いだ。

その後、田を覚ましたアクマにすべりぬちねち説教と技を繰り返したのは言つまでもない。

一方、当の魔王は子供たちと何故か妙に仲良しになつていて、

「ねえ」「ねえ」

「ルシファー?」「

「なんだ? 子供たち?」

「僕……」「私……」「

「ひりで呼べばいいの?」「

「え?」

「お兄ちゃん?」「

「それともお姉ちゃん?」「

「ああ……、こーどひひりでも」

「じやあねー……」「こーとねー?」

「やんなこぬめずとも本筋にひひりでもこここそこだが」

「「おぬーひせんー!」「

「は?」

「おにーひせんでも」

「おねーひせんでも」

「ないんなら」

「違うんでしょ?」

「だか!」

「間を取つて」

「「おぬーひせん」「

「……あ確かに」

こんなほのぼのとした会話を繰り広げていた。

やつして時間がたつて、『氣付くと窓の外はもう夕方に近かった。

「ああもひつねりお歸れさせてもひつか」

会話があつて切れたとき魔王がやつこつて、立あがつた。

……ん?

「帰れんのか? 駄喰されたんだる? 強制送還でなければ専門家的なものを呼ぶが。

楽に逝けるぞ」

「いや、良こ。こつもつれて帰りねばならなことだしな。それこ下すれば消し飛ぶだろ? その専門家」

「いや、たぶん下手しなくても消し飛ぶ、ハイシレベルだと

指さした先には本当に伝説級の悪魔なのかと問い合わせたくなるほど弱つちい姿で死神と折り重なるように眠りこけているアクマが一人。それを聞いて魔王は苦笑を洩らした。

「人間の魂を永いこと喰らってないからな。昔は長くとも五十年に一回は契約できたんだが」

すこし愚痴つていいかと前置きしたあと、やっぱり表情は見えない顔の眉を寄せて魔王は口を開いた。

「今では悪魔を呼びだそうとする者どこのか、そもそも自分の闇を自覚している人間が多い。闇に付け込もうとしても、その闇にのまれてしまふ悪魔が後を絶たないんだ。不滅不变だと思っていたものが少しづつ数を減らしていく。だから混乱して皆必死になつてゐる。こいつも何かを思つて何かをしたくてこいつしてこひに私を呼び出したんだろう」

こいつは腹の減りすぎで頭も口も回らなくなるし、最近はこうして行動を起こす悪魔どころか悪魔そのものの頭数が減つてしまつて困る…と魔王はぶつぶつ不平をこぼした。

オレはそれに笑うでもなく同情するでもなく、ただ「そうか」と一つ頷ぐだけにとどめた。

所詮はオレの手の届かない世界のことに対するし。

もし届いたとしても…もしくはもう関わつてしまつているのだとしても、やっぱりオレは「そうか」とだけ答えたんじゃないかな。それがオレだから。

ま、どうでもいいことだが。

「で? 帰れんのか帰れないのかどっちだ。即行で答えるアクマ。

でないとマジで消し飛ばすぞオレが物理的に

「なあうー。なんでアキはそんなに攻撃的なんだよー。 ああもう帰  
れるよ、帰れます！」

アクマは文字通り跳ね起きた。

上につてた死神を吹っ飛ばして。

綺麗にくるくると回転しながら空を舞う死神は一瞬の出来事のくせにスローモーションのようにゆっくり見えた。

じずっと尋常でない音がしたと思ったら、巨大化した死神の鎌がアクマの横に深く深く突き刺さっていた。

実態はないので見た目だけとオレと魔王はわかつていたが、自業自得だとばかりに固まつたアクマから目をそらした。

「で？ そこんところはどうなんだ？」魔王

「ん、メフィストが私を召喚した時、どうやら壁に“道”を作つておいてくれたらしい」

「あ？ みち？」

「ああ、ここをあつちをつけなぐな。あくまで簡易的に作ったものだからいつ消えるかわからないが」

そう言つて、魔王は壁に近づいて焦げた部分をなぐる。そうすると魔王が触ったところから焦げ目が光りだした。

焦げたのとばかり思つていた部分はよくよく見てみると黒い手のひら大の魔法陣だ。

それを見たアクマは、即座に復活し、びしっと魔王の前に敬礼の姿勢をとつた。

(「マイツゼツ一オレの部屋にきてから回復力上がつたよな

そう思わざるを得ない回復の早さ。

「セヒンとこは平氣です、魔王様！　俺が責任を持つて、柱立てときました！」

「ボクも手伝つたから、半永久的に使えるんじやないかなあ？」

オレの額からピキッといつ青筋が立つた音が。

「余計なことちぎる十点減点」

「何が！？」

「百点ひかれたら、オレ直々に家追ん出してやるとこいつ賞品が！」

「凄くいらない！」

「副賞として、業火景品ヨーロの狐火が付いてきます」

「字が違つよあつくん！」

死神、泣く寸前。  
知るか。

「まあ、と二力く帰れルンダヨね」

「あ、うん」

それを聞いたとたん、悪靈どもから不満の大合唱。

「「ええ～～～！　おぬーちゃん帰つちやうのあー？」」

「またこれるから」

そりやそーだろーよ。

「「うちや忙しいの」「知つてゐる」

魔王の一言でオレの堪忍袋の緒が限界値に達した。  
だったらとつとつ……

「帰れ」

そういうてふたりの魔界の住人を少々乱暴に　特にアクマはめり込むほど　壁に押し付ける。

パあツと輝きが部屋を包み込んだと思った時には二人の姿は消えていた。

## 10・鳥が帰る、夕方。（後書き）

秋たけなわの今日この頃、次回更新いつあるの？ 教えてついでに助けてアキえもん！。

アキ「は？ 知らん。」いつも忙しいんだよお前のせいで。消えとくか？ このあるたりで。買う？ ケンカ。今なら格安で売るけど。タダだよ口ハだよ無料だよ」

マジすんまっせんした！ 勘弁！

ビーでもいい余談。

この仮小説タイトル『おぬーちゃん』でした。

話ができる前から「このワードだけは使う！」って決めてました。

なんだこの作者11107211

ちなみに、今日キリサキの学校は台風と新型インフル（H1N1）ってこうんだっけ？）のせいでお休みです。やつふう！

「意見」感想その他誤字脱字などがありましたら、よろしくお願ひします。待ちまくっています。

## 11・星光る、宵。（前書き）

そつか一四か月。一年の三分の一  
うふふふふ、すみません。orz

## 11・星光る、宵。

「おっかいもの」「おっかいもの  
「どれがいいかな」「どれにしよう?」

幼い者特有の甲高い声が冬のぴんと張った空氣を揺さぶる。  
それぞれ楽しそうに口ずさむJソング。

お手々をつないで、大変仲がよろしいようだ。

仲良きことは美しきかな。

こいつらを見ると心の底からそう思つ。  
だがしかし。

「ハルーあれ買つてーーー!」

これはいただけない。

結婚もしてないのに、駄々をこねる我が子のわがままを聞いてる親の気分だ。

「いら、静かにせんかい」

「マスター、普通の人には聞こエナイから」

「オレが耳障りなの」

他の迷惑なんぞ知るか。

ぶつちやけ、死神 悪靈 悪魔 神など見えない人外系統にはほぼ

常識というものが欠如している場合が多い。ついでにわがままで自分が世界の中心だとでもいうような傲岸不遜ぶりがムカツク。良く言えば誇り高い、現実を見ればジコチューの塊。

しかしどいつもこいつも結局見えやしないんだから、そんな奴らにずっと昔から接しているオレは配慮なんて必要ないことも嫌とい

うほど知っている。

オレは一つため息をついて、オレにだけ見えるふたつの影を見上げた。

ま、悪靈といつても今のこいつらの思考は完全に子供だしな。

一応、い・ち・お・う、聞くだけ聞いてみるか。

「で、何がほしいって？」

そう言いながらちらりと財布をのぞく。

うん。それがなんであれ今余計なモノ買う余裕なんざ、これっぽっちもない。

「あれ

「具体的に言え」

「あれだって」

「あれだよ？」

ふたりは同時にぴつと人差し指を突き出した。

その先は

「ありや？」

「あれれ？」

「あんだ、欲しいもんバラバラじゃねーか」

別々の方向を向いた指先。

子供たちの細く短い指は同じ方向でもなれば正反対でもない、てんで違う方向を指さしていた。

「いらんモノふたつも買つ金はねえ」

まあ、もともとないのだが。

良いいいわけを見つけたと、再び歩きだそうとしたそのとき、誰かに後ろから引つ張られた。

人形だらう。

当たり前だが、この中でもに触れるのはオレの他に奴は「イツしかいない」。

振り返ると、変な顔をした人形がぼうっと服の裾をつかんでいた。自分で眉間にしわが寄るのがわかる。

人形は悪霊たちを不思議なものでも見るかのように眺めて、ぼつと呟いた。

「珍シイね、ふたり一緒にやないなンテ」

それから同意を求めるように、くじゅっと首をかしげて俺の方を見る。

いや、そんな目で見られても。  
まあ人形からしたら驚異だつたのだらう。

毎日家政婦よろしく家事を一手に引き受けける人形だから、その中にはもちろん買い出しも悪霊たちの育児（？）も含まれている。  
ずっと家にこもりっぱなしの悪霊たちと生活のほとんどを共に過ごして、時々気まぐれを起こした悪霊たちが買い物についてくる日なんかは、それこそ比喩ではなくまる一日一緒に過ごしていることになる。

そんな人形が、一緒じゃないなんて珍しいといひことは珍しいぞいりの話ではないのだらう。

未曾有の大事件級の出来事だ。

「なんでなんで！」  
「どうしてー?！」

答えに窮して、微妙な気持ちで人形と見つめ合つていると、ずいぶ

ん上方からあわてたよつた声が聞こえてきた。

見上げるとさつきより高い位置で、ぴったり同じポーズをとつた悪

靈たちがそろって頭を抱えている。

悪靈ふたりはうろたえていようと「うよつも、愕然としているよつて見えた。

言葉こそただ困惑しているだけのよつに聞こえるが、その実彼らは絶句して立ち尽くしていた。

ん？ 空中で呆然としてるから、飛び尽つくしてたか？ ピうどもいいな。

そのようすはムンクの「叫び」の」とく、奇妙な光景であった。いや、むしろあの絵そのままといつても過言ではないだろつ。

一般的にあまり知られていないが、ムンクの「叫び」は、描かれてる人物自身が叫んでいるのではなく、「叫び」に怖れおののいて耳をふさいでいる光景が描かれているのである。

だからこそ、言葉を失つて頭を抱えている悪靈たちがそんな風に見えたのだろうが。

「まあいいだろ。それぞれ違うモンがほしいってことは、そんだけ『自分』って奴が育つてきただつてこつたひ。喜ぶべきじやねえか、成長」

悪靈どももそろそろ物心ついてもいいお年頃なのではないか。ついつかいたずらが過ぎんだチクショ め。

自我の芽生えこそが成長の証、とかなんとか昔の偉人が言つてたような言わないよつな。

悪靈が成長すんのかどうか知らんがな。

「そウ、ダね。今日はお祝イカナ。よし、今日の夕飯ノ献立ハお赤飯に決定。良いよね、マスター」

「勝手にしろ」

小豆か。

最近高いが仕方がない。  
めつたにないご馳走だ。

居候の祝いとは言え、甘んじてやろうではないか。

……親バカだというてくれるな。

## 11・星光る、宵（後書き）

とうあえず、読者の旨を申し訳ありません。  
なんでこんな更新遅いのかとか聞かないでくれるとありがたいです。  
学生なんですねストがあるんですねとか言いません。作者の力量不足  
です。

というか今更なんんですけど、サブタイトルってあんまり内容と  
関係ないです。適当というか、その場のノリでつけてますんで、な  
んか良いタイトルがあれば教えてください。  
それではまた一ヶ月後くらいにはお会いしたいです。  
作者でした。

## 12・青空、赤くなる前（前書き）

きつぎり2カ月以内です。  
更新速度…どうにかならんもんか……。  
ホワイトデーはオレのものーw

## 12・青空、赤くなる前

イライラしている。  
イライラしていた。

「おー死神、何キレてんだよ」  
「怒つてないよ、イライラしてるだけ」  
「やっぱへそ曲げへんじゃねーか」

嘆息するあっくんを横田にてじて前進。

ボクはいま、自分がひとに見えるようにしている。

もちろん姿はあっくんと同じくらいの年頃。

蒼いパークーに、古びたジーンズ。

結構前にあっくんに買つてもらつたお気に入り。

すりきれて、色あせているけど、それも時の流れがさせるもの。

その流れがとつても愛おしい時もあるけど、でもいまは……。

「なんだつーんだまつたく、何が氣に入らなかつたんだ?」「別に? いや、あの時は大変だつたなあつて思つてさ」

「…………ああ、アレな」

忘れたふりをしてとぼけるあっくん。

ある意味ありがたい、ごめんね。

今日は久しぶりにあっくんちの学校へお邪魔した。

まあその時はさすがに姿さらすわけにもいかないし、消えてたけど。

その日受ける最後の講義だつたらしく、あっくんは疲れた顔をして

「今帰んなよ。帰りに新しい服買つてやるから」と引き返しかけた

ボクの袖を引いた。

ヒマならこれで終わりだし授業でも聞きながら待つてると命令して、  
むりやり自分の横に座らせた。

ボクもボクで「ハイ！」とか無邪気に喜んでたまではよかつたん  
だけど……

「あつくんみたいに憑いた人も、友だちだつた人も神もみんなみん  
ないなくなつちゃつた。ボクが殺つたんから、当たり前なんだけど  
ね」

そこでわざとケタケタと笑つてやる。うわ、サイテーだボク。  
ま、人間の想像上の死神はもつと最悪だし冷酷だし鬼畜だから、た  
まにはこれくらいいいでしょ。

あつくんは眉根を寄せて難しい顔をした。

「ここだつて何人もいたんだよ、昔からの友だちつて呼べる神さま  
が。でもみんな、疲れすぎて死んじやつた」

「過労死？」

「過労死つちゃ過労死なのかな。身体的にはそんな疲れてなかつた  
んだけど、心が疲れたつて言つて早々に死んじやつた神もいたよ」

今日の世界史の内容は第一次世界大戦について。  
特にこのあたりのことについてやつた。

最初は  
たつたひとりの神の遊戯。  
たかがひとり、されどひとり。

数ではない。

質ではない。  
存在なのだ。

神というモノは。

事実だつた。

すべて事実だつたんだ。

80過ぎの教授は空襲はいかに恐ろしことだつたかを、手振り身振りで延々と語つて。

『空に浮かぶ黒い粒。それがどんどん大きくなつて我らの頭の上に降つてきた。恐ろしかつたよ。これほどまでの恐怖があらうか。私は戦争が终わり、思つたよ。心の支えだつた信じていした天皇が、神が我らを見棄てたのだ。そして国は国民を死神に差し出したのだ、と』

いつもは眠そうにただ淡々と進めるくせに、今日に限つて涙ながらにそう熱く講義を締めくくつた教授をあつくんはこれ以上に恨んでいた。

(ンで、今日だつたんだよ……ー)

あつくんも表に出さないだけで、そうとう怒り心頭つて感じ。心配してくれてありがとつていいたいけど、頭のぞいたことバレるの怖いじだまつと』。

「ねえあつくん?」

「…………なんだよ」

「もう帰る?」

あつくんはがりがりと頭をかいて、首を振つた。

変わらないなあ……

これは彼が自分の中の何かを切り替える時のクセだ。再会したのは最近だけど、最初に会ったのはずっと昔だから。

……変わったのは、ボク、なのかもね。

そのずっと昔から彼のすることや考へることは変わってない。そうしているうちにあっくんは一軒の店を見つけ、ボクのフードの部分をひっつかんで店内へ引きずり込んだ。

店は今どきという言葉が似合つ、実にカラフルで明るい感じがする気持ちのいい場所だった。

「服買つて帰るつたりーが、何のためにお前を待たしたと思つてんだマヌケ」

ぱかんと殴られた。

いや、イメージ的にはぼくんとかぼこたとかそんな感じの擬音ではたかれたっていう方が適切かも。

まあ街中だしね？ 遠慮したのかも。

珍しくあっくんにしては常識がある、ちょっとした驚きだ。

「オレにしては、つてどーゆーこいつちや。オレは常識人だつーの」

「あンれー？」 声に出てた？

「出でるわ、存在が非常識神じんじゆ」

あらゆる服を網羅している店内から自分に似合つ服を探すといつのもなかなか難しいのではないかと思つ。

それこそ、神様でも至難の業なんじゃないかな。

今度きてみよ。

ボクはちょっと軽くなつた心に嬉しくなり、気になつた服を手に取つて体に当ててみた。  
まあその氣になればどんな服だつて着れるんだけど。

「あつぐーんこれども？」

「んー？ 黒のとつくりセーター？」

「セーターじゃないよ、しかも言い方古いし。今はタートルネックつけてこうんだよ！」

なぜかボクに教えられて、やして興味もなきナリでいつなづくあつくあつく。  
あつくんて若者の自覚あるのかな？

普通神サマとかのほうが世間知らずなもんなんじやないの？

ボクは地域密着タイプだからあんまそういうのないけど。現場人（神？）だもんねボク。

「あ、そ。だけどお前仕事でも黒私服も黒つてヤになんねえ？」「好きだからいいもーん。あ、こいつの白と、このジーパンは？」

「いーんじやねーの？」

「あー、見もせすひビーーー！ こいつなつたらあつくんのも選んじやあー！」

「オレの許可なしに何やろ？ としてんだあアアアアー！」

楽しい。

と、思える日がまたやって来るなんてね。

この記憶を抱えたまま良かつたかどうかは分かんないけど。

ボクも死のうと思つてたのに、みんな死んじやうから死ねなくなつた。

……ひびこよ。

ねえ神様、もうすこし神生をエンジョイしよう。  
死ぬなんて言わないでさ。  
あつくんが、悲しむから。

## 12・青空、赤くなる前（後書き）

この間にや、らゴーークは6000、PVは11万をとうに越してしまった。ありがたや。  
コメントも色々貰つて、作者は感涙でセルフヒロヒー状態で「Jぞいます。

作者が今年受験生で更新がこれからもっと遅くなるかも知れませんが、どうぞ見捨てずこれからもよろしくお願ひします

マイペースで頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7455e/>

---

オレの部屋

2010年10月9日17時54分発行